

貧困の計量政治経済史

Historical Political Economy of Poverty

安中 進

岩波書店



評者



津田塾大学  
学芸学部 教授  
西川 賢

## 貧困の計量政治経済史

安中 進 著

岩波書店（2023年2月）4,800円＋税／182ページ

### 貧困を読み解く

「生れては苦界、死しては淨閑寺」という遊女の哀切な生を詠った句がある。遊女の多くは貧農の娘で、貧困に喘ぐ親によって妓楼に売られたのである。この句に表されているように、貧困は人類を苦しめ続けてきた。現在の日本でも、少なからぬ人が貧困に喘いでいる。

ここで「貧困はよくない。貧困をなくそう」などと一般論を述べても仕方がない。それは当たり前のことだからだ。より重要な作業は、貧困の実態を解明し、貧困の原因を突き止めることである。それは貧困をなくすための真の作業につながっていく。

政治学者である安中進氏による本書は、信頼のおけるデータと最新の分析手法を駆使して、日本の歴史的事例と日本を含む国際比較によって、複雑かつ逆説的な貧困の実態と原因を解明することに成功している。

本書によれば、松方財政と呼ばれる1880年代の日本政府の施策は、農民層を身代限（現代でいう破産）や税の不納という深刻な窮状へと追いやった。特に零細な小農の受けた打撃は大きなもので、彼らの多くは税不納の状態に陥った（1章）。その結果、税不納は同時期における自殺増加の

要因にもなった（2章）。政府による施策は必ずしも社会的弱者を救済するとは限らず、むしろ社会的に脆弱な立場にある人々をさらに追い詰める結果を招くこともある。

日本を含む多国間の長期比較から、民主主義は乳幼児の死亡率を引き下げる効果を持つとする4章の知見は興味深い。同時に、当時の農家にとって主要な収入源の一つであった繭の減産だけではなく、鉄道の敷設という近代技術の発展が、地域によってはかえって娘の妓楼への身売りを促す要因になったという3章も重要である。鉄道が普及したことで、かえって幼い娘を女術に売り渡す親が増えたとは、悲しい逆説だ。

ここで示されるのは、民主化や近代化が、必ずしも貧困を減らすとは言えない事実である。現代の日本政府も、この知見から学ぶべきである。

著者について評者が敬服するのは、「今なお人々を苦しめてやまない貧困の実態を明らかにしたい」という実存意識と、著者の学問が連結している点である。この10年、分野を問わず研究者の技術水準は（おそらく）上がったと思う。しかし、それがかえって「何のために研究をするのか」という根源的問いを見失わせつつあるように感じられる。この点で、明確な問題意識に依拠しつつ、日本の歴史的貧困を学術的に解明した本書は、実に「美しい」のである。